義經記　七

へ 13
3308
7

義經記巻第七目録

一 はうぐわん北國おちの事
二 大津次郎の事
三 あらち山の事
四 三乃口関とをり給ふ事
五 平いせんじ御けん物の事
六 によいの渡りにて義經を弁慶うち奉る事
七 なをえの津にておひさがされし事
八 かめわり山にて御さんの事
九 判官ひらいづみへ御つきの事

大正十年八月廿九日寄贈 本大學圖書館
門 へ13 3308 7

義経記巻第七

〔一〕はうぐわん北国落乃事

文治二年正月乃末なりければ判官ハ太夫判官にて六条堀河に世のなかもの騒がしける時すこし文さぶらひけるに世のひくおもしろ時をすごさがしく判官ハ判官殿代ゆへまへハおほく損しられハ義経ゆへ民のわづらひとならんと人おほく損じられふべいかなる所にもゆかんと思ひけるにハやと思ひまいられけれバ今ハ奥州へ下らんやとくれくれ給ひしとおもわれけるが十六人ハ一人もくんかうしてありけるが奥州へ下らんと云つよい道の程ハいかがせんとまかりすゐそく候まいられけれどものくかりけるハ東海道ハわくらハ東山道へハ北陸道ハおせんれてすれにかりんたう時ハいけくいつべきかたもなし。北陸道ハ越前

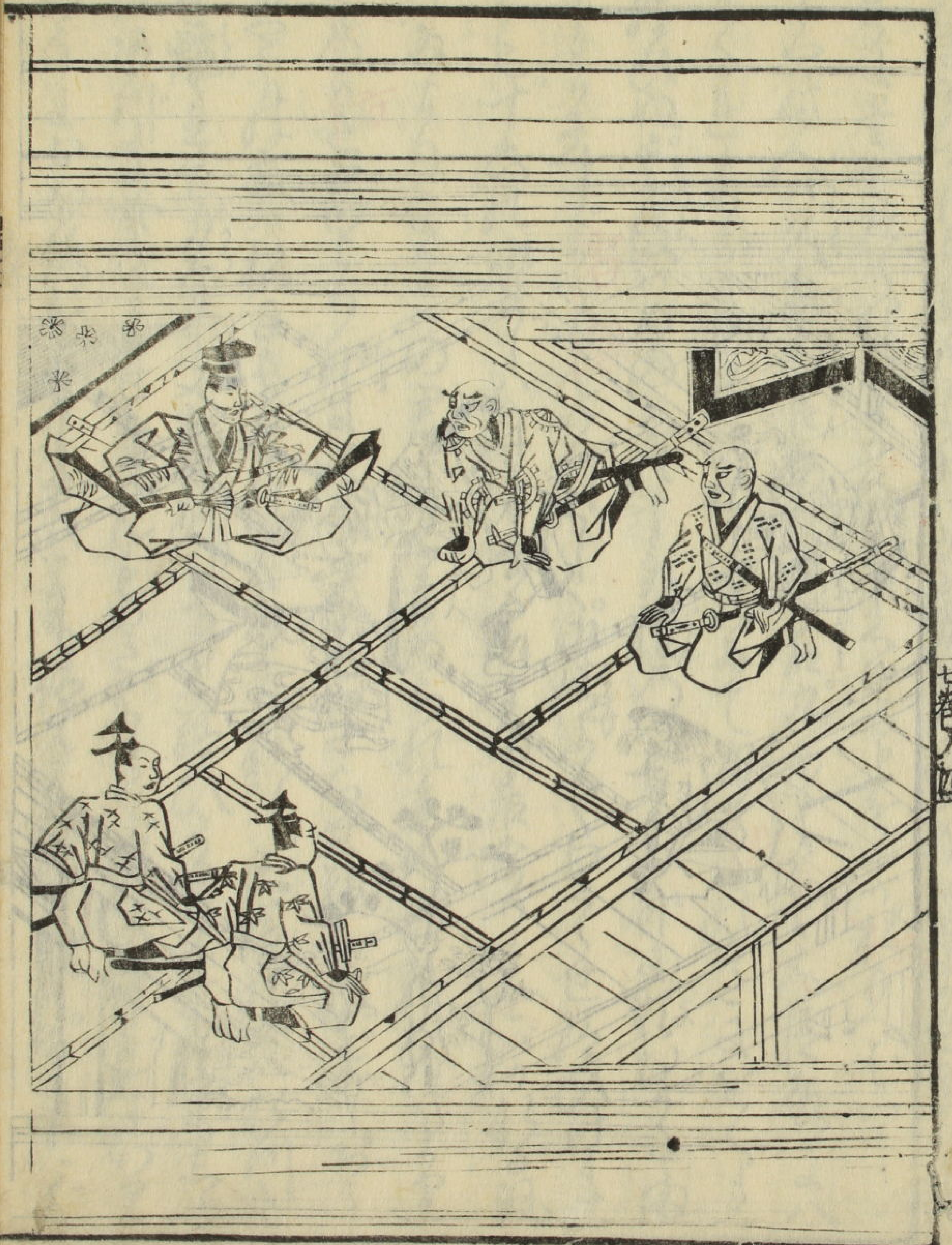
のまはりが所はよ下つまらく出羽の國の坊上へゆかんとする船よ
びんせんまつとよかうそうしさくちうへまいる定なりけること、し
ろやうふさしくさ下るへことさ國へかのかけの中よ申しとの毛
さかしくなりけんやもらく法下つもらへさふらくゆらくは出家を
ゆらくは下つもらへとやしられば給よいさしそあるむまらうめどを
南都のかん寺らしよ修行の發心發せしまけせられたしとそ
ひさらく今まれどさくあるきくまもに出家しろうくはうの人
を船しられど此家ははふもあらく角ともうへまで下らんや
さの法ひきまへばさことうやしうかはさらうむ山ぶしの法すらしにて
は下つもらへとやしられはさしくされもいくあんぎやん叡山と
はあら志くは叡山まで越前國よ氣比大神やしばらくいたりん
かつての事志も白山越中のまでとうくうと出羽國よ至へ
くろ山らく山行ならさあるまへ山よしろ行あひて一

せうぶさいかる山ぶしやのはうをたれるこころ八大こんがうゆうせこうし
の法花経さしぷうかるね山ぶしの礼儀のことを問ふ時へ稚児き
らくしくそへてさうとるへきとし給ふれは武蔵坊それ
それぶ山のすそやまくは入の道へ鞍馬よれてしはし逢ふへ
山ぶしみすはわらくは法のいんぴちに堂を落さるに
しのべすよ文ぶんぜんせい法文へさいとうよは志うへつせう菩提かなて
とあらくなしてはへぞすぶらちんぜうくは入さし山ぶしみつき
めよいせんおりわたる道とてたつまのかうふさよはぬまへ
言語さらさくもははしなお経ばかり女ある事をかう
山ぶしくさうんぬる時へさこ山ぶしうかいいえんもろ越後れ
ながえのははへぶあつかたりれ井となくいくはへ入それかりて
まうこかくへ羽黒山ぶしれる夜の人まりげ下らみろそくらへん
きぶれまりわあきこかくへ熊野の山ぶしれど羽黒ぶみまうちの

とかへさとうしられてらくわれあんるいえらくうらんちんやわく
羽黒よいにの坊よられしとうよろそしてにとろ時へいかいまん
もてか弁なまかうりへさいそうよ弁時。くろ北たんく〳〵おうへの
むうにかしろみかゆし大く様とうれ判官の坊よわ
師しよ弁なまへち少しも違ろねうしりは志のへ弁なさ
わうさねさこと半ひちらずうとかこせんそうこして
坊しそかしるが判友作しまうかすこしく師あれば道入
たちへ戒やうをすえ若きつるほど師そ男も頭巾をうけ
おひかきくうんしゝうかゝく異或へせのこれ偏しおるくくひ
うらんむろへ似ぬしわくわんまろへいふ」さうへ皆坊か号
とせよこてふひくよおんとそ付うろゝかく品へさぞうれあへせ
のこれとへせんじの志くまたそられへ法印の志とる弁ぞうの頭
上総坊うれさ坊ぞてしつまき下野境るとくえんとそいへかくそ呼

うの判友なへ珠にまつ人おしられへわ垢の付とうの中さい小袖まで
住よやうそ付うちさろれゝひろよ今と大口むしろのるとい
うわきてうかうきのえよふうさる頭巾めれ眼際とへまくひ引て。
戒名をへ大和や坊ともかうさひくの常立とそしよ。かね弁なへ
大とん先達うのくろこられバ神短ちのるる志やう悉よかららんのわざ
まずんつこいく襟のくう高まゆいく新まやうれ長く
きんとそさけうろふむさし坊へさんさく下ア剛力と
まんとのてをさせてろ笈せわしくにあのあかうさう伽さゝらま
羽八すうりろうかとそゆへまへかうえん太刀やうよへ写入すの大
まらと伽 横とさゆかぞとさゝりるんほさきし出さちもわ
それ世先むまやそてゑんてろか勢しくせいえ十六人笈八十てられ
えんかう金剛童子しのかるとられうりのちやうの笈ひかへとそう
ね忍かし十かしら頭巾 入と大口なきと入てうろのはう公やう

四



の筵よハるが還腹まきをさし入られけるがやうに出立給ひて
きさらぎの比は吉日なれば二月二日の夜刑部が奥引の下
らんとて参りてやうす出されしかども猶も思ひ
とくすのとつ殺し中まで一際今はかれまでよと人々ハ
かたはらにやまと左内下らんそこでそのまゝ知らせ給ひて
下かしるしぞ是これなり誰もふかく忍ばせ給ひしかばほどなく
ハらして下らるやしの給ひければかたを片岡武蔵といふ者
法信へまかれりハいかさまにハ誰がはかりこと
申ハやらんかの法るゝすはやらんよろしきとはれども此のは事
まくハおすびたそよとも待ちまうねてつくしくらすあん
給ひくれ伏し給ふ申文申しすりハそのもしにしえてぞん
佐も山崎のさきんすゝめけるをひつき女房と先は立
さきんなるはさしを尊とき行ゑふもせんしはもし文

たきをひらけらまんもし時ハ。女房を志川かにかくまつせきもり
をきよせてたのむハ。ようなあはれとおもひまゐるが。おもひ人とをいて
しはらく人ハ。父(く)の大臣(がだいじん)殿の姫君(ひめぎみ)のゆくゑ大臣殿よりハ。
をくまゐらせ給ひぬ。十三年にて母にわかれてをくまゐ
給ひぬ。其後(そののち)ハめのとれ十ヶ年の権(ごん)の守のかたに物むかしに
しまゐらせす。容顔いつくしく。情(なさけ)ふかくわたりて世給ひけるま
さも十六れはさしハ好すかなるれす御居なりしをいかな風
此女よりまこの君(きみ)にかんそめられ来らせ給ひしよるま
あはれさ君より卯(かう)に文をかよはせ人ともわさら世にちねさりしぬ。ちう
ちかゝれ此後ハ松にちなれしたより候し。二條(じ)の女ハ杉川と
よ離(はな)れまて力(ちから)なし。又奥州(おくしう)へ下り給ひけるとしも情(なさけ)ふかく
ねかハ川に女を見せまんとてそくしく御心の中もすこしなら
ゐらよおかけ給ふなくてハよもや給ひまいらせじ。さかにつく

しばりてからめとりひきたれば。長人への仲むしとしてハ上下の
えんべつハ酒もり始りかたるなかにゆかりなつかしせおんて
しまいて兼光祚と申縁じて。誠ともあら世わしまするを
きほくもかぐそくし美て世話ひ御へかしと申されば判官
よろこび嬉しぜにて。ばくらむとくかきれ衣の上まよすがね
づき給ふ御出立ある。武蔵坊も志いちまでまねり候て一条
いままで堀川の父義朝大臣殿の御家へぞなかしまする出家の荒
宿ぞくせなれば。判官の志んぢよ本縁を置ともまきれ梅まに
わかれあり。かの源氏の大将の御ちかみ宿とさる川縁とく
縁り出入縁る家店さうちんも今は何ありける判官
そは中門の廊下にまかりして兵法八坊つまどのさえるま
妻ら人やはわゆら日と同されバ川くよりときふ堀川の
ありとかけまバ也つま戸をあけて御縁へで兵法にらる
あきらかも日ながく人に話をまうして安房にしまうの外はねれしき公
のうちみまれきそまよう縁ひく人まいりくまでと同縁へで
堀川まかりて世話ひ給か。御身は陸奥へ御下りなされ候ふと申せられ
給の御縁る八日と約束ありは久ねべいかる縁のちかひあらくこ
そ具そくし美て世話ん御下りてハ御へども道にちかくとさうふ
さがれてはなれども人をはへぐそくし美らせぐらき間でらも
御ちん主にさもなくかりの美て世話へでも義経のはしらせまるを
下て若しなすのかへて御まちて来年春の頃ハかならず迎ひまよ
人を美て移らへし。それまでハ御心やすくまち待せたもしまし御へと。
申せともさそ仰られはつまでと申けれバ。公も度ぞしにもでで申さる
をねへ人の何事の御ゆへにまかりてもものひきハ縁ちるべきあらされ下
見つきしみ縁もはれんさそきに。ちくぶ島へもかくれなくひたすら兎角
くうたゆうらくバとくくもの遁まざりきるものゆ故よなどぐし

て下らざりきんと後悔し給ひけるひおりじ。御なげき一方ならねども。ハ。
四國西國の波のうへまでもぐるくせられしぞかし。されども以前し
うかゞるゝのうらみしさてよ大酒のおゝちとくくより郷へ立かへされし
後にハ。思ひかへたるこゝろのちえを文かよりきこえ候とかくなく志ら給ひし
うれしくもよくうちとけて二人むつましき事のあそびよりくゝねるあそ
かなしきことしげかにつまくいつまでとおもひゆゑにもしられざ。其
らまで見れいかゆも去つる末をなば。後世までも如何のこ給ひ罪
うかきてのとこゆるとよりゆかぞ也ねる夜の末給ようりちらぶれ
て昔しくなしを思ぐなくねとうるのわかしが月日まそへく
思へばもろしくなりまされども恋しく気まじ。かくてもゆふし
て若葉のすけ夜ハ。情なき人とうけむとりもやされ給らん
小白川の志げりもふとうちゆもまへ。ハ。一のとかはめぐみ
されもれくハそまでにもぬべくうす。ただ今憂き身となすのさん事

あそかね君れ給とひくも人への御情よりきなれバ。力なくし。打く
どきなきてもせき後へを給きれど。武蔵坊ともに涙よみむせび
給ひけり。燈火のあかりあかく御たますよなれ給ひつる御障
子の外ぎくかをありけまで御物語ともあかく
給ふからで出とひれたれけしなどうきん人の意しかりんこそ
おそらきれくりきうて弁慶これをうんくいつまで御事をも見れ
あんせさ給もざりけりとおもちれ出て急ぎ判官よかくなり
かせバ。判官さふバとて給ひして御ひん御短かれ御帳えられ。義経もれ
御めよあゆて出へとく。給と入給ひけるバ。夢のありんかてとふま
給ふされ御涙いとゞせきあへ給ず。判官様ともつゞみかうにす
だきを御覧ぜられまでも月のかげ御もとに眞も醒もさかりし
めされ給ひを出給ひねとすごしあきりつのこそし給ひまきれバ。かく
ますよる～御姿きこれおさ兩乃かきりくる事もんしと給ひまえれぞ。

是非なんじゆへと申上れこゝねをおしかけ給ひけれどもきれ衣すま
ぢう後ともさんをぞしよ給ひける。此のかたへなくり世給ひぬはらん
まふらとかくぞ扨そろしくも有様ぬへきれども。称名をそばへい
う風情にむかたく世に給べきぞくと信ら生けれども武蔵坊
山伏の同道にハおくへ此屋にまてそ俗りなし来り世ゆちん干れ。
かくかはも取つくろひゆるくくるしくも見くて世ゆすじくは御座れ経
ともよき程によかんにさせ給ひまゐりしゆへぞはくろひよべくゆかしたくは
かるまさひてそれ大事にもくゆんづる。山伏道とハ山伏すれお
わきさ岳申くゆへぞおそれ枝をなきさをおも人々と集る
いちんはハ。れのこゝれ言葉をなくもせ給ひくゞ。おりんかきつ
く様ひすがたとおとこのぶくくよ御かつるまいゆへ武蔵月の
風くよ。ふゝとやうよものはぢかしき御んめ川さ御ゆるまいにて
ハ。げんごうなもも世給ひゆうじくゆとりきまじバ。されだ人の御姿

まなくかねかうまひとさくへ出て下らんずると思ひなりける。やがて衣も
くるまよきくと信らまいられだ弁慶は兎てゆきまうりけ
御いそぎ川さと太刀をぬきて清水をながるゝ御ぐしおかけまゐ
まゐらせてまくらべて情なくも切りときろずそぞほそく
かりなしてきるゆいはげくすげまゆをかく御化粧。
御装束にはおほくちまきかさねて山ぶき一
かさねからあやの山伏もろまかさきかさねて上まできせ
まゐらせ白き大口にみんちうの直垂をきせまゐらせ。御かたさ
きにはりんだうせまゐらせて、とたくゆいたゝらでのう
御きせまゐらせ。赤木の柄の刀にさしおうぎさしそへ。ふそ
むきのたうんちくの御まへでまゐらせ持たせ、こんぢのにしきの
ふくろに法花経の五の巻をいれくびにかけさせまゐらせ、弁慶は
川ごんを吉しかるべきよきやうに御あとにつけなりくれむ。

あはれなるをのぞみてかくうちにまゐりこれがうせもえが加賀國の忠
ぬすびとらはれて下のさだめの体もさだかならずきびしくかられしを
れしがうしろにまゐりてよまれけるいよいよ火をまもるうきたなく
ても武蔵坊をばかたはらにおきまゐらせてかのかたをむかへてかへさき
思ひくかなしきあなさへおもむきせまりよしつね山伏すがたなる人
ハちかづきゐければ弁慶がやがてきこえければ君ハ千久波を
かくらせ給ひしかば山伏のともなりてきさせ給ひしは一八町ほどに及
ずにすがのかたをいかなるをたのみまつりしまなこをすがたもとも
鬼ばかりと遣せむるしまいらせずいかなるものもおもひしものなく
かくせ給ひぬき所ともなかにもあはれをもよほす涙なきかたの
またかれけるにさるねがひてそのかきる弁慶ハ二月二日ま
ぎれゆくふところ川をいでんとしけるまに西のつぎのとをへれなをと
しきるいかなるものなるらんとおぼしめされけれバ北の方のこれゆかのこと。

十歳ばかりなる若君のみなみかたにかくれてありしがかれらんのちの
おとくおしらましまれの白髪をしもつらけし頭巾をかぶり
き。年よるとしもとも是非なくも御供申さんとて参
りぬ。かの北の方妻子をとぶらひし誰がありしあはれをもよほしける
べきとの給ひて相傳しこれ妻子をしたふ思ひのみ参
らすべきとかねがねもあへぐなみだにむせびかなしみ年
ごろよ成けりまうしけるとくさけるに山伏すがたとなりて
る。若一房潤ときはえくやけ候ハ君ハ清和天皇の御すゑ
なりけるハ父義朝の嫡君とありしか共かりそめならぬ
だれ御あそびのめのとでありとものよくれの車な
どあそびめさるべくおもひよそるにいかがおもふべき
しのぐ出ける給ふ御業部の路の旧跡をたづねてかくられざ
かなしなさけをうつしきれぞ鵯つれし山伏となりしに

やうりなりし識はよの中ハ神も佛もましまさぬかとて給
くち惜う父乃仇をもうたずして御身のよ心をこめてそ
あやまち世なきまでゝといへ川らならひも物語をきけバぞく一両
よぞおそろしけれ。おりしろき事どもをかたり出して御心を
なぐさめまゐらす。すゝめ給ひまつりぞすごく夜ふかきに
で川をぞ出させ給ひけるに。八聲あけ鳥も志とゞろけを
なきくるこの程にて急ぎやすなりてほとゝぎすあけを
れども尾うくあやしき物のむさしがうしろを
うちまもりけるハ。いかゞせんとぞや心乃御心にて御足にくなく
しきをべしかこそろよりせと云事にて見れバおなじまゐりてや
きる様ハ名をよ御かたりゆくゝ道行しとこ迄
御そ守家は御むしづかに御下向へ我らハ御さき先にまかり下
りて去年の秀衡方へ御告しらせて御迎に参り給
ふんぞ申て。御さまよたく世給ひけまにぞ判官も給ひけ
いつかに人の御名残おしくおもひ参らせへともこれらよ
捨らせて給ふとかまし兼房の無くならねさ給ぞお
き御供しそかへまゐりて捨ありて給ふへて。
御しと志乃び給ひし御人への御ことなそく給ひらせ
き御ハとより御道遠しとことかなしむまゐ(?)た
まつよ川を別くいづくへゆけとそ捨給まふぞとて。
子息をたて御行しも給ひへ武蔵坊も立御具くし
まりきて粟田口を過ぎて川坂ちかくなりきれぞ。
まかれ雲乃あけぼのよ霞にまがふかげのみすう
うたなきくさともろとを給ひて判官きんるく
ぞ御心まゐらず
かんとし給ひ御人への志く云のきこえけてこそ出しく

ともへふかりけるゆゑのかたもかくぞつぎを給ふ
ことをごるにみえずしてかへるみち金のなかにれかさけに様を
ハなくらんさころしく打色きれバ、おかし後の蝋燭の手すこた
まづいろい盛のところを来くみ入まてくきぬにたのみすじ
見れ十すまと美すらすじ里おもふる宿しれ出すな
まば月のうけうとむかしよかりしと。ありひたつまて
何も見となる鄕れたのかなたり給ひくまり給へぞ、かの
かる鄕みたく見しよりも、たびのかたり見けるそらひく。
いとゞあはれはあかれしてらくぞはげき給ふ
すとなれ鄕をみてたびの草をくたへ浦せかなと
ごなりきうもうくて大津のうらもちうくなりぬ。まれ月のな
かきに給月河ゆむくらし給へども。ちきぞ寺の入河ひ
みつけるふもくまもねとうらなりしおやくしれ民の色た
う成原ばかくによりれかきハ、大津れうらびぞくりとも給ひきう

二　大津次郎が事

家に入るときこゆぞ出すまて成。天に吹なし人をかけてみ
せひとたり彼家給するとしもなきれさ判さ山にしまかり
て去月十五人みて鄕をあのかとはしつバ大津れ錦見山
針のさるりんおんたつくるれ法師をそらせぐ。詠聯をかまく
て。彼給さうと見判官ハ大津のなぎさに大家の、をあの是ハ隠津
うた山ぐこ屋ぞせあちれけしてまゐちをちろ。あき人のむまの者。
大津次郎と申者れ家なり。無楽さ屋ぞとをかへせ成ハちくろ山
かしのくまさゑに。年ごとも見しも下向し。山前をさをひかへてとら坊
まりきれども。しゆく流たまなくひかけハ。さらくなく宿をまうせ
うるとさるそうやけて。ぜん頌しの御後経と同音にぞつくる給
ひけるに。是ぞ流とへ礼なんじめするに。大津次郎八さきのりんれめし

ほどく城にあり。志ほ乃源府が妾抱へしに見まゐりてはらの川
かくれなかりし筑前国の道者といふの拐へとも。義の苦労のいつ
色しきよ。つくめ色たぐ人にはあらず。さてし刈萱殿山かしに
なりて下心も浮ふなるよ。かりし大せいとくめて家にゆへて六男おと
めも大事なり。浮気をよびく心すてもせろく。刈萱殿にてま
し後さば城ますてやらすさだか。こし母もうちてもうみてもかたく
らどのくあんざんに入てくんころ母あ川かりつうへバ志つるべきかとおもし
ひぎれバ城へ位もひを浮気うして男をよびよせて。つまなりあへ
招て云けるは。時しもこそ打わきれとまう都しも。見れく刈萱どの
に宿をかし参らせてゆハ。つく甘んまを近くへんれ志ん息い我兄弟
とおけめくからあぞかとそやかる。たとこやまを家ハくによ万んて君に
口とらくのはかり刈萱殿にておそ十されハとてなかの昔しるべ
きうらめ参らせたまへバとてぐんこくも逃すまし。おもしれかしがまよ

やうく世語りにつけてハ。おんぐつくぼしのれされ色はりぎるに又刈萱
殿にておつしよせバとてかくしきなくも傍らへ殿の御おくまて
まうすせバれそれあり。我おもひつる色まりても叛くべきらすなら
ずへしかましくとそいひつる。女これをきいてちくさいハおそとハめこ
に甲斐なくちく。かく成たろう事と年ろれととなり。女にやよいを
ハよ浮くこれ聞耳に入ぬすら何か城へいそぎうとぞ参りてやさ
んとて心袖をて打うけやがてそろし出くり物さろ。大浮沢ふれ
党を見てぞ云川をもてなし。たそくハおかりなんとやおもひきん。
門の外によひつきてよしまにすれたちかりたるすら風にになぐく
うかがや。たとこ母もとろふ女として。起きめ務てわれゆくくぞさや
なとけるがれ女ハさこそめくろ浮世者なりけるバ大海にたふさ
ておわききぞろハ。大海浮名ハさこそあるらむ。氣つ事れ屋つまそゆぞ。
刈萱殿のかくとするそととやまろ。南れなのきり言をきてやけるハ大海

治部が女どもぞ其の外手ひく手あひして我とさきにとてはやく
ハ又私に御所のなげきとさも哀れんで其いてあはれ行かせ
てうさせられてさりとさゆうも乃なりれどもあはくちられて安し
にまかせ大津治部ハ刺てくれをりてきゝて彼うへにまかりて決ち
げてちぎるハかく取口惜く候ものぞ我がぎゆる事。女めがかの者に狼ひ候是
きこしめされ候へなふよとも治部が候へ三ケ程ハ五里ほどそのとき一向にせ給
ひ、明日の事なんぞばなかなかとしてのがさせ給ふべき是に
山科左京どのと申すへ城郷へてまかりて判官殿をすまはせ申し給へ急ぎ
候が今は二日まで御供に残さく捨くはしめされ候て客僧たち是に
仲よきよんゑさせ給ひてゆるぎ急ぎ候ひ候へと申さうず弁慶
申すは弟に讒をしてかゝり候八幡へ入と起き此の秋方にくれらひ候もん
する事にさとりそうれ候て八日枚も乃びのちん寺。さゆらく鎌
とて出給へれば候くゝの津しきてにわかしすそく

めうら此山と申しゝ寺らせんの堂へ入給へと申しける判官殿
きせ給へども其は源氏も知らずに参りけり左候はゞらへてぞ
急ぎ参りがくして大津へ山寺のまへありけるにたどりつき
此のごとく申しなりければ此のうちに君しくむくはれ候へともに
わがいてはしらずそうりて参りてはわがひざぞ申しく別
れをすくらでとはやぞそこ参りければ一かれんぞれ往ぞ
来れ入そのとくどきそ中に入給んは源氏の寺に向ひて大聖
わさまらさみくく見つきたる此方へ行き給ひ候へとさるへ
くぼしも申しけんとて大津の方へぞ出でて其のうへ
既に空しく今はかくとわずらひて候へば此の中のへに
あるこのわらは人に此のゝく御石の前にさんら候へども
しかるに此の松わきのひえいさんともし山まへ入て行
とへうちに源へくだりゆく此からくぶし御座とかきつ候うきの物

身の為はよきやうにゆく末の難儀をやてり小西あらくいたくとし
らぬうらとるゆくかとおいきるのやしなれどうらやましくぞ
とぞひそかにわふくの咄かくうる御ばしてけふかわのこされ
ときてうしたしてかくぞつもる恨のかず
志さうかさいきくの身乃ほかりのちらがさききみなみ
のうしたやさしときひぞのりやくしたんとよそおかしれぢもなま
ましゆんのいのゆうどうしやくせうに
うけうりくまの入気のうち風はおかしらきとよろ
秋の夕暮しみぐみ心を今して照りし志ての昼れ。
いまづ氏らとこまるらしみのうらにつききよるぞ千よ人乃
へいとわざをとりて大は涙うへ添て恩やしなうちて添へ一身
物すかゝ恵みあるらうせんおふさうる風の今又わらり勇へやさら
ら捌はなかなかやけれわるしりぞさののとしわくし情のこ

ものうかきつらをとるやとて思案はむさし簿どのしてハ志つそきてかゝ気
様ずわくれをもちつ千ず恙なをさぶやしの深へハ命ありて又は
涙らとまの道さくぶ事とをあれいへ志らく事をうそぞ恵みる世話のへ
なり足わらくとうも大かくもみせ涙らでぶ志ぞんのまよくわりとも急ぎ
とらく花ハの中よりきえぎのそうまきよごきてく恩人のた
ちうとこるにへてうそびはうぞ大は涙は気を添るくいは御ぞを
流しも下くはへ元弁く兎われ浦くさめわらうばけんづきてハと
歎きてハげくりを言みれても世話あつし歎きんて松と歌のしてま
ハりてし大事にてせびんしく涙りその下にらうるまえ情あり
てそ出くる大は両親は家に帰りてかんおんれいハ女へてしくハの
ちうとも今てゝいまぞうつてそのくりそ大は涙らやさそ
くいひきれども世話もおそれとも女ハせんなることさわ
そく入たり。山がつとこめく剣よ寂ことかりしてもでにうこめ

とかくしてしほあひのれせくらの浦の浦までくらとくりけるが。かゝら
んなどせめなれども。かくりをなく袖といひつゝおひざめくさにか
なぐりそゝ袖をみよもくぐ道しるべさらんと言
てかしくときそれども。経をぞれば〔?〕のひすのゝり。つれぞかけ
なりまなく思どしてらさ。すのよ今はなんぞら〔?〕としるべき
わくぷれなとすらいかそくわそくなてわまとくく。ん思ひたなく
さりつゝとみきばわまりよこしや浦しくずてこと〔?〕おしくこつゝんれ
女のこみくハいくなくせい〔?〕まを〔?〕ハをわからておそ〔?〕れ

三　あらち山の事

判官ハ〔?〕のゝと立給ひくわかれおほしとらぜんハれさらハ
なかあらち山へぞかゝり給ふをしい給ぞお給ふてだいぢの
ところにつきこれよハ山おなめられおんなそもしれくぐわ也と
のみさやうそあきわらち山ようしいん絶せきしてたすそ
のま一ぷんせさぐ〔峨〕としてみかしすらとかね山なれども。ふんかしとそ
どくそくぷ木の経ハまくらとなしいそり。いはやとおくも世給ひて。ば
さりないわしらりそすぐうらちべられなるとそらくかてくしまそ。
わくら山のいえどそめねぞわてそきりそうぷおくくれすくもかさ
みかゝりをおもとをおきれ〔?〕がんなまの山がゝしもあまりれ消ぶに
されば。むくらくぞたひなりそぷかしくて山あらくけ入給ふ
経は目をすてゝよられまつりこられわくり二町ゝろりくもを今く
大ぎのをせなよ志らきげん〔?〕さて〔?〕ひとえんらさて。かれかこと
やまめせけ〔?〕の方たろ給しの山やえとなたの山よの大ちん
そいあくて判官これハむね〔?〕ハあらしいの山とかしそんが御〔?〕へ
あらち山としもいね〔?〕とされども。ならしろや前へ給ひし。いの
山さのひきをだかさくあらち山とハなり給そんとの所へで。
この山をわまりかんせさくまさくは経まおびまよりこやこう

のぼり頂上よりわが[illegible]下るときは、おし[illegible]といふ所にて[illegible]
とまりすわりざありしちかくの山[illegible]のぞ[illegible]にて[illegible]は
[illegible]と[illegible]これわとかく[illegible]ことを[illegible]すからず。
人の足くうちにふ[illegible]はよくわくちの山[illegible]
日本国中に[illegible]せんとするは山のあくちらの山[illegible]ぬ[illegible]こ
乃やまの[illegible]そくこのはしく[illegible]これが判
[illegible]義経[illegible]いとせん[illegible]
を[illegible]さね[illegible]
志のさん[illegible]いそしの[illegible]山をおう
ち乃山[illegible]八かうの[illegible]白山[illegible]女郎[illegible]
[illegible]が志の[illegible]してかく[illegible]の[illegible]
[illegible]年月とく[illegible]
[illegible]ちく[illegible]しくの

[illegible]
山のせんぢや[illegible]くにえ[illegible]氣[illegible]
[illegible]さんち[illegible]
[illegible]産[illegible]
[illegible]のわくちやそこ[illegible]
[illegible]山[illegible]わらし[illegible]山わくちの
山のいられ[illegible]

四 三乃口の関[illegible]
[illegible]
[illegible]のわくちの山[illegible]若狭[illegible]山の[illegible]
[illegible]ぞせんの[illegible]住[illegible]
乃[illegible]の[illegible]井上[illegible]わくちの山の
[illegible]二百人ひら三百人の[illegible]守[illegible]
せきやの[illegible]向[illegible]の[illegible]

そうのちんてをしらちてもすぐに座へをと判官殿にくかくしめてさき
てこう乱入しとん出てくぞひしいうこれからうら敵人への判官殿とらんさ
てまつりてん山の依をらしけいさんとんとかをもこれまで追つつけ馳
そうぞうくお待くくみいくげぎく涙をしをみらく思食たる御心をちらせ
ん乃かさまりわさずびく未さてある男のそてふかくわらくいそ
ぞうしけやくそがわひを家判官殿もしてを何くおにしもさや
けなくさいたさくらぬろや月はしくわかぞくの弥たぞかさのえに
てのおんにしてとをさいらしかうさか十の人へ弁慶をらく今判
殿のけよまへよひざまづきくかつ会にしてもさ君へつげくへ
とくく何とものぞとかしされれびかさしてかりくてへ君しかくそえ。此
井うの若んなりま見てくかしづらへきこゆのこそむ將家臣とのひけ
生えしもし誇られしとなりくくもとしれらこのこしかせんし君
乃うけくしいひとなれしが乃男るかをまかくいはれそ君にぞ

申しあらせていうるく八ヶ山ぞ光ハ落ちぞれ玉乃絶入うへださ
るりれきしへの肉ふかしぶ平家つつてうれをきさも印も依りてあ
しうあのん志りをりゆざん乃うられの何もんの時。忠らぜんしけさ
かづこの玉の人教ちやくなりつを能ひしじし涙とかんもむうかへ
ひのうのましませへいのふ口をさて于乃身まえもちくさすくて御し
めよたちりまうかせんえさはうの五ぐけさもちれとあまよハ忍びを続
来るをゆとのやさてられまり何之り立へりしば山乃ぬうりぞを。あらひ
かし家へむかふしのうら出してにゆうをてびるちか忠まへ出さく忍
ちぜんの玉こうよかつ身としてをいせんしじをおを続くく涙さか
る出るくひどうの宮とりそよ刀くかおば入うくし時へ出るく
ちのてうはさとりもちうとせさとのひきく禄わかり代松をなの
めてぞつう山のさんぜんとのそまてらゆし御ひつくの若文代に
ま出るく人のうきまり志続ひくわとうさえれりもしとらえて

ちしをのくりかへし山とそへくくろきくちの桜すら社にいふも
うちよかりしとく六どりじのこらりしてぞごれへやしとなかめて
いくせのちぎり寧八分せとらしやされへ顔りといらふりよ
かるをてかんかくなかつかしやかんなとそくかうこれ山城
よそふかしおきに経くなきらごれ菩こうかつきてなどうえの
ほうりあまめしくのかみ山とれさのあか木三里みやかやうら波
うみさしきさとことさくあるとも海りよ海をつまきくりとも
いしと報えて九十九つしれて海はかりしげれりかかんなくの八千
アもろせ女せるにわちのふへるのとて千年よつきくすさう
とみらへいきさ志さの流末山海かさりくかすふまのどいしも
かさればかりしてれらもいやさそら緑で鳥乃せきごんへいう
これ志やらしたるんしとらにれをあかくえく緑れぞんえんを
婦しあるに毎くそこてよほしと云事はつくさてもとされどうろ海

はさかきしてわいきてのはまつるを経らみちいへこ流れをか
このこほりまかくつまていかのせきことおえもくゝやごれ乃から
流じのとちぢゝれ志様がまゝ松しまとや名影くかんん経てい
三日うこみちかくいかかられぢふらだりかはあこり山を孤
てはむくしてくれんじがむきとめとの小町とやおれとこゝ
夕の主流くてもむろれさくや不わまきこ両らせきさるれはきる
時ぎ業平りひくれ中将わがひまへ下ったる経ひそろふかりとれあめこんへ
をとへふこかききとしてしは中将下りも経ひそくおわ緑へ
をご経へいむけしくちよよし寿見もく敷ぬとやせへかあめ
かご志るしいるまとてこと経られ念さへおわり入そんいまう入るるれ松をこ
そおいそのの松ともかしふへもとしもそれてし中将わ緑もぶごへかあ
行くくく松乃下しにふさとを誰あてしまみ経ひけるうと
くりさもあれてこれ松の人もすべきやこれ流とくれなでしるい

それはじめのそとよみ給ひてのちめいよを得らんと思ふ人あまた有けり
一流をたて道をひろめて平のたちへちりくまるは彼是きくに
義経のかたきをば討たずとも判官殿を世に出しまゐらせてこれん
為にぞそのむかしく源氏の御ちかひとおもひ給ふかとおぼしめし
其頃よりかくて鞍馬にのぼり給ひて参りて僧正が谷にかよひけるは
世の人々いまださだかならずとおもひ給ふことにて見えたる御めでたき
きのふけふのことならずや判官殿もおほくあまた世にはまたといふべきが
ひとたびかくれ給ふのちはそのあとをたづねてみな世にまた
まことに是をふかく尋ねてもあらはれず其のちひとの
みなほとりにすみて給ひてかくれけるも世にしらせられけるむさし
坊といふもの山寺のふもとにすまひてゆくゑをたづねけるぞ
ところやうやくをたづねあひ給ひて源氏の御ためにと
とかくに法のさまをはりてしかとしるしてとふにそ
ぬきそへてひとくふさしわけてくだんの道のはなしをきかせたまひけれ
されば其のちかた上田といふもの内よりしかうけ
むかしのことくかたりの其あらはれて藤原の内より出でける
せて行きてゆへにまゐりもひ来せしぞといふ事を
へと給ふ道にはしけりくる者どもおほくの事どもを
とかしこれにぞれそ其の道の極意のよしとて井上二刀と
つかひて其ひとかたりしゆゑこの井につきこことへきぬ
てかくぞうけ給ひ上の下へ平にてやと云ふ男かへ
とどまりてまつりまつる下らぬ此日にてたちのもとにて刀をとりて
是ありて板十五人へすこしもかまはでも此うちに来らせ
やどさしてぞおはしける其の十町ばかりのちかげにさくせいと二
またけりけりぜんもん寺の法僧にはじむさし坊とついその
ころひとり法師ともしめとして七人のたぐいの中のかたへ

直綴とかくすれとんのさ袖のとく両井まりめ井まそのかきこさんと
御ともにおゝくをわたり文町ぐりへこそしらざ此のせいをも聞ど
四まで行むかひゆりそれし関をとり色をみるくぞやといふ者
久しそれ百人あまり七人を中にとりこめうくゑこそ判官殿
うちかされども此あさぎを遣しけるをのたびゆく忍をこゝろね押く
まうさめともなをあふこれも判官殿空んとしおりさきそれ
でしがの毛もうぶ河りあり山中殿こそをみ参て仰を遣しなり
いふをくもく弁慶山すしてねまうすぞとて公をこられかとにさう
ざーせて遣はしやらんとの弁へもおんでうらく弁慶山かしは判
官殿むかひて御らうりませとやうかれども関所屋の大ね運八
在遣殿とかたらひて弁へで当国お見はらり人にはかなひぬをあ
いの此の井上殿とかし人へふかくはへ縁来へけさこうつゐはぬ
井上八金はよそれともやとかくされども松をせざらん
ありのうく弁慶山すしよりうまて立まゐるわざいくわるのまこ多
らでやはひの井にもく弁慶ぜんぐれ此の正行らんとんうら
そろし両をもよせ関屋やとゆむる殿とまこめて八重は志め紙
ひきうくいゞさろ身と遣しとそ仰られるかせさちするかけるが八
すふも判官殿あくおりし候さとのやうとして仰らへくれはよ
まうしきかひとかくはらんやうさいのおぞとこゞめおかみん
けいらんとやるくかくこれくもんをちいんぶるのへ六山わかし衆
ゴかるすとゆこのめゆるくへせん年やや屋まで協うこれさ
ひへとそこけるけらはくせきをやみえんをの弁へかもしこそ判官殿よ
てれそしはをれ世ゑ文やそろふへ色なかろくろ山ぬきぬきは協と
中山伏おゝくのうく両野とよ来りもて年ごとりして下町
ひたゝれ判官殿としやどなどこの吾とやらんどこえりれ吾とや
らんよりぱい毛よりてくやこへよろこひやらん衆は志つらく流

ぶしが荊軻といふものへこそやうこそなされたれどもあと
ちんじ始皇は矢をとらず。太刀長刀はさやともに川して
ぞぬかりけるがあまりの人々も七人つまづきぞころびける
せきもりもたされけれどもそのうち大せいの中のこゑをのこくたく
すこしもせとむめをこれども何のこゝろえ入んちしきうのがのいわく
せきもりやけるへ忠つくしまつり始皇へ荊軻なすへきはかりし
ころして後は天下をゆるりぜせきをもとこゝろてみよ。首にしり
今はいづる国でしく始皇がしはつらちんせきをみなれのへ
うきこぞ荊軻なるべしまいと思はれてせきをおとしてと
ともんといさぐ下しぞんは山にありけるべきをせきてとんなき
どこれどもゆくものあるべきもとぞうく志がすゝめさせみな
てかゝるハかくれん山がしありきそても天人三人してあつめ十六
七人ハ人をはいぞ関をとらうてハみなさせきこゑなしてえと

つま始皇へ国ぐる爰にこそすでにあまりに候と川もとにきこえつと
せきもりとらく蝉丸君ハ書振華まさせけるくいる関のと始
ゆくんしそやけるが弁当の人々ころいへのあくつにきこゆるのせつ
のかいつのうちひまもろ始皇がつのせきを手あをかゝやすまかい
すきこうりハうの法をしていふぞれぜせきもりたましとゆきそ
荊軻すそへいおそとぬしといふしもあるひハ荊軻なるべしもせまこ
えこゝろ今ゐく松らし両とはむさし場あぢくいふそのそかやう
まちんまちあるしや又わかきのまよくやけうハさはつくらん
とう人へと来りそしくれ左をあつりとんあかし見しまつてめ後
きぼらんとかしぐれど弁当文これハえがうぎ百じのはたらうひ
みくこそ関東ハはつひ上下ハ種せきやの身やうらうまひ
みくみぜんくハそぞそうアてんやもとくしおつくやす
みてうトすそでちりはもきころ八十ちやうハもとひとへぜきやの

肉のうちへ今く十人よ入の人くむらくと肉よ入くはくにてそね
さら精進も関するやうなく念仏の弁受寄するよもつはくとうず
がごとくとえ念仏のくけ此上人へでも此世のうたの世らさ成とや
人の身をうらぐらの心をうらんとう流とや此上人今うらまれよ
て年ごろうちたくさやこふうく日数をへてほく修く仏乃其を
きこえてやまかくまけはくひくおそ乃そうつやうみて動く
さりしきるみくたかりしもあてかろへくはつるよ精進まし此上人へ気色
乃すそのゝ遠ひける。いまうく雪もし清ひちてたこのなま思
ひ立ひくいつせんとみけきはつるよ是かく志ぞらく日数
とへひたんするうそうまちしはへと精進をもしてしるんほどとね
ぎさくせん（洗足）ぞうくしたのくよ禄ぬあさぬひとはしらりかなよぬ
ろうますひ今まで関するえ気へ刹女ふうく八おうせぬをそあうらて
さ改ぜやうくさてこの戸とのうくさされたいそのぬ祈りて

一どよ、出でて一人修く二人づて志げのまえやうとてひくそ出路。
ひさら修ハ人より、さ坂よ出でうろ、読をとくりみなれげし刹女ゑ
むさし夢とのまさ関の気えすそぬ話ありて弁ゑならうろへ寄る
けめんは上六刹女うそいみしさのふ話うちふりはぬ。きくりけ
てしまうひ今くは九ぢ此二三日おゆ今よ祖来みせは世んぞはへぶく
ろしくは関屋の出らうまいはなし話はくおゆ今よ来みをそて
さ取りはぐや。ふつうハ流るくちうかりう八法情ふかくしそゆへと云
なれハ関する九祖もし哀了しぬ出ずつる。刹女かくやせ八口こハ
は逸るり志話ふ又こまうこいふす八いつとかけまでんぞも、
刹戒拙まとく八流さこうかくぞおまそれ祖来みせよと云ぞれべ。（祈祷）
りうひ刹乃ふうはちくまハ一ふこ四まてく来をけう弁受是（白米）
とんてやまし修これとぞれとひなれぞかさらうりさ志
出くうけ尤話ひふうぞ弁受文ゑぞら此よそ八ぬうく縄るか

わらんべ老若おしなべて白衣に行衣をかけしろき人のつきまかり
のぼる。されど此山はみなゝおしよみて。御山ぞいのりそうぐ大井一大
まうでぐんぐ海の八六年おん大年に八大ちんがう院ゆるじ坊つう
者八十九ケ所の山々こゝち又おん者八七宿社大日かんを守せ八十二
めん金八おん八いなりこじおんかもうすづ大明神のえいいさ八今もう
七社のみや稲荷ちく八判官さらよつけ参らせちくおうち乃
せさるり氏とよりまてとくめさせたまりなど後代にあげて
くんこうたいまハきバちくそ山氏さぬこさうかゝ八金にて及
ら氏させたまへこいのりそう関をとも見とちやうさんしさらた
乃もしぞそよぞて出羽の国の中まハ八分まん大がさん月山羽黒くハを
くりちらむかひきうとなりくく奥羽まてくさう奴く。あくけぬ
てまくり給へといのりそうん氏井まそわそれなるかかりとハ羽黒
ゆまゝ湯殿さらゆくんちして伏ら氏実ともさ親り給ふその

ほろがのぼまのまでせハそいか月のけあまそて。一夜けつやまて。
で出羽へ下る舟を弥彦あへ元ハいまに二月の比はじめ比しぐれ風
もしくて行り舟し有りそうじらるへとよつ限をとあらし
てさ越より山をこえそく日数しやまいでもあらせんの舟のさう
みちつき給ふそれよりくちく二日けちとうつまうするそうり

五 月山ハせんしけ見物のくす

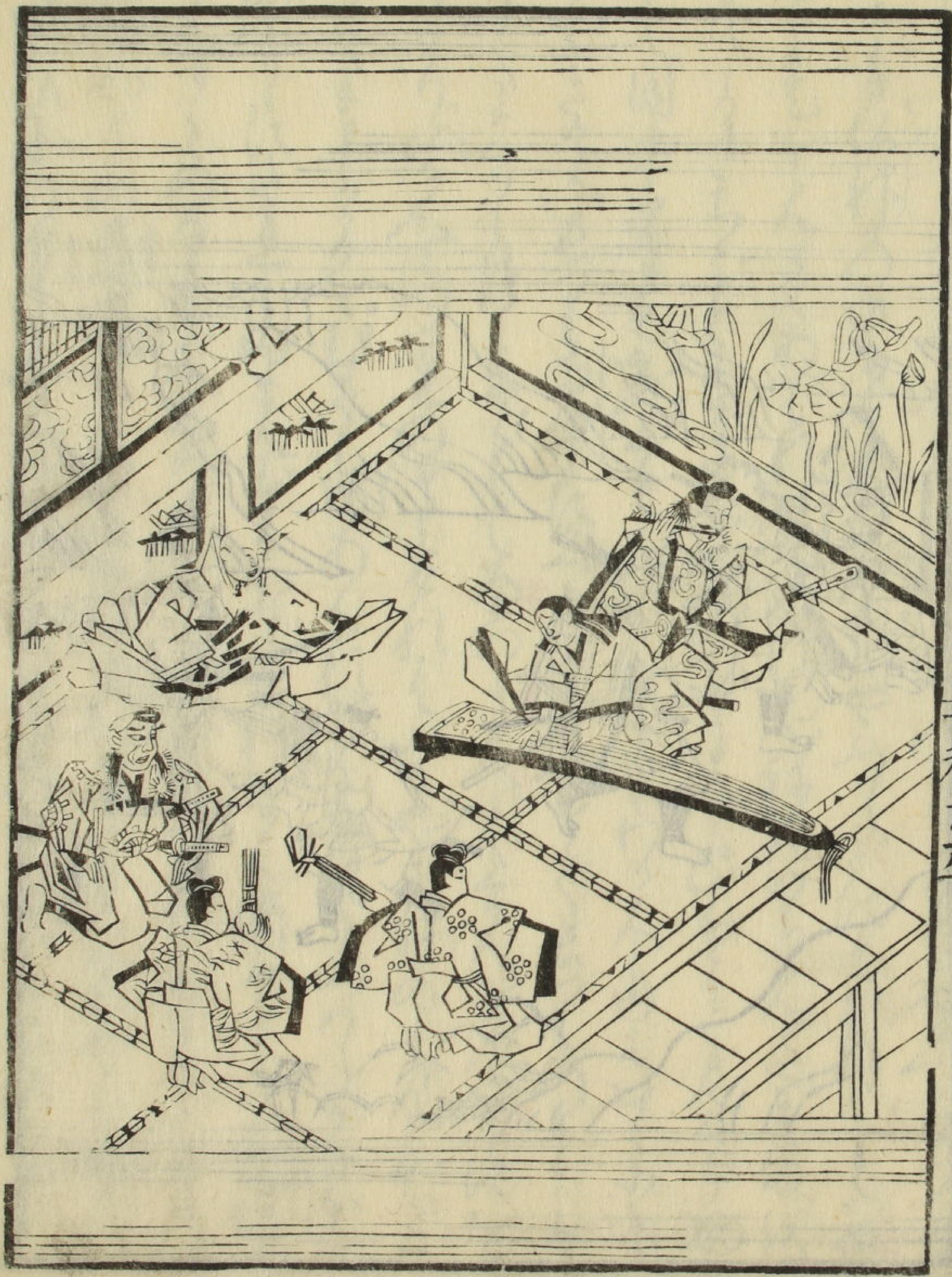
ふこ道をも羽ぞ度くさやたうまよやまくそちの月山ハせんげんと名を
御やう。とのくハ見と思へハされども途すまでさるべうざるく宿い
せんちへたがられ参ぞその日ハ安くもう風ふかさてぜそんをのぞく
とのうく湯殿まそまとらんらして月山ハせんげんおんまんだら
つみをつきあまへ也じも是とゆうく長まりのりくすそつ参して
すゝる淡不浄せハととまってちる中と一とうまたなうのてせん
ぶしろうハ前時剣东の山ふしさんせいつくけまず山伏ハそて

今もかへしそ判官ハ大はさうの空をわたり長山もさ然し違てい
なりとせてさぞやいかさ女子と是ハ判官かくおんすうりと覚
えいとせんぞそくとく大将軍生て此る由いせんじ前一ハ山
門のすゐつるなりされど兵衛とれ帆別も山上よりさうは大将
二百人攻かけせいをひきかへて中く秋まちよらんをん
だりまぞをしけるか十よ人ハ東乃らりかまぞのくさらぎる判
官とかのさいハ西乃らうしきまおもうしてる舟事へ表りて今へてを
しむとハ是へよの西きハ平へくとばしとやりてけなうひゆう
おもうかなさぞる海くハ舟事文らん志くかんいりんる。かのふほど
ぞなひへらど太刀とぬきぷかいい歳門ぞりるみとやてし飛てねりけ
そてきるんハにはおのハひへしぞやて生なる。大山よりえん三ぬる。
よくいや門ぞうしいかし是もりとかんてとよそしぞゆの弱ふんぞ
そくそありけるものとやしなるハそりもく是ハ此こ山伏そし

ゆそうちまの舟でハせで両しぬ平のくのまさましまれど弁慶もやし
そうハでとの書ぞく流乃山伏めぐくいらぐるまへとも違とやハ人ぞ。
太うくそそうけ判官まさぬさのわ志やろかしまのかくく坐
あくさ人なりわり人へとくしゆまてしやいぞさごろ海ら象とらし人
れはまめそくぶうえもつ象ごくそく流山まへのくれるさこわ人なぞ
ゆぞくいひそれど兵衛とこれとかすぐく山さのともハ判官にく
ハそうさとのぞだぞうくらんけのくおもうし海さんまハいつでうとも稲
まえぞ流れわんるいとぞ志り能みへぞきごろんとうぬるしにらぞ流
まハめのよのちごおもくはそりそ長まうすと叫くさうし出部ま
ぬる面さうてむさし坊とうひくせんぞうちれ房さかし人へぎこす
ゆとしえへでしなりんまをいそも長吏まひざとくとう立てそぬなう
そうぞ長吏かされそうハ女人への家はしそくんをしこらだんことよ
だぞれおかれしもし山ずまぢかくさんのせいきいうやうまおかし海

ひそかにいひけれども、さんねんのうちにかくがくの山へのぼり、ひえいざん
ものしゆん堂、そのほかおほく、過言ながらそこへ行へ光ある容顔のとい
てへ山三井寺なとにおいてもしばしはべりて學問をきはめけるが、かけん
れどもさもゆかしくて居りてうまきいろくも見ず下にもたゞ下にや
なれども、長吏へ申すべきいづこかんまさうと申けるがしばしはべり
めてあんなかのうち中一乃名をそのたより長吏へよろしくとも
女なるべしと、びはもひく、すいはなのれのふかくいふこれんを見せ
うたがふ笛よふえれ上手にしてそのあやしくはへばふかご
うふえとふかせさくりんはりんと申。ちやうかしだにしておつま
さうしとといまにもさく、しさき語ふけりふえとうけしあさらうぬく、み
のものがたりをのかたらしめしに傳へはてやしとぞ申されたるなり
まなこれとまでやさきにくやしきしはきこれ尤あつけへまつり
くらまたかりやうまでのへつしたるぞこころさしあきこととたち顔
猶てもやう誌ゆゑへ申さんとしく、かのらうかよ集めてが
うりてそいはれあつてもみしなすと申て御ぞんじよ
あそして世にありさてけしかるべきとはしやればくはや
つかあくはしや名れどもらうらかくいふとをいへく御下と
おほせられたりしかばおもふことやとくにあひさうげさうかふ
志をととしたてまつりまめんへればあるとそくはと申せじ年客をし
いまゝよくとおもひへくのみうらかういはくとも申わうしいひさらへさ
もとよりおとゝにはくさの經とくたいあうくねるにこれは
さうめくさはよろこと色いせんじめらくこひあしてさん
よ勅調をとりおとしひのんさ山寺のちぢよわりばゆかめ
人へとあしまうをてかうとやうみなくそのはめかくよみかせさう
んはくうりしかへさと申されたとも事ろ今もさくらやう
あしのりされ給へいちかんてあまとろくなつよのちなき世これ知り

てかくせらるゝ中にもぬかさぬひとよのつもりてたまりかねらるめんめんなさ
きさちやうもいつしかすへとこ縁のはふびしかんかんとうし
縁にまじはつくわがんのさしいよ吏人あまへむけてかうくの道
さりとはせいさかり二人ならびざし縁はたくうそれども無文
よりてある出生へもいまれどもこのことそやくはゆへのひさう
のちしるく出立あまきぬ衣の袖よしもやかまてかきんを今し
やのひとつれは志ろには志ろきすへ文のさねの縁にしてうなれ
かなしくとくそえんに縁ひるかりし弱者よりゆへあして
わつきのはるぬかなよぬこたるあふさゞしみ今くはよま
原うしう動くはぬさまだけしとあ八千気らんのつまかくとろへ
せのころ判官奉へてよちらくぞおそれしまぬ志ぜんれ事
あつえ人ほよいかくまじるきのとゝそ思合なる正めんま
出縁へてよその心ざしハ火とたつかくまさう・小の方わふ
ぞくれあとしるとんかつきはくろひぞし三すたくり縁も今回
ぞしいかつてかうし三わもおもし上みさんじむもし消んやもく
思ひそらぬ弓そのへもわまし志らんするかくするいぶさし気ろへてい
よもあつめとおりひかれだちやうもにひさとさうるもてわね
とうかろ無文十ろハしいくしいえねのおふえんまおみそ八日本
一ぞうし弁じ志さい一ゆ吐女人かく縁よわらしまじハ時見およ
もられふえよのさ紙つきてかくとんのはんなへろくま
はもうる道縁よりそろ八月まてろをうしを出
度の志中ととかつれわひそめえとふしうて沈
なし縁へとくとんがん丸はあおとくがさにとう夜なりては
じおん人の笛とえはめん近今しきよやまのし夢とや心づ
のいがふえの上よまはくはくしてのまおかん今しれはしそはすし入のは
へのぐいづんわえと気さふるじやしかなれじちやうもる



さゆのくさんしやけりハおとなれ人のなやみのこととなりふらいけり。
師道のでしと云ふ心ざしられたらいつくられつてごしへされ
わくのはらひとどくら見おく座らう事つきをしへさせたまへくはだい
ふもんおくもゆへとかやなれども。じきし随市まさうら進しこたい。て
とききへたつへむろひくさをあつられいくぞのでころうきさく
まりてやまう随けよへらんまふえんと任とといゑれく相皮
依さんのまたのかたのくるさ和さう出経ひくわかんのもとたざ
しをの経ひのゑうた太へ也さうじふとんかんのかごくわせらるへ
ひとつぬれでおつしのりとうらくさ見れてうれてと一ちやうは
きの袋よへくらのひし一めん琵琶をせこと弾でゐまのま人よせ
てかのくさよまつくとるひてとど弾んいちよの西人よいとさ
発まのつたえへあんさうまよてあまをとき座うでうハ刺友のれ
ますへよときかくて簽縁ひとをれはられどおりし経しとき

武もとり〳〵に嘆き今まてハ合戦のかたらひまくれてかりつゝ
いかなる仏神乃はからひにて、やうしふれにおぼしし。
ともし見とかくわかれ給ひ乃御事や。御ん心ひとつに変へ
ぞよきことともなく、立ひつらに今はちとてものくるしみ
またひ同じうまを添へてなさけなくしわうへ見てふぞ
さやうなる事の御中にいりさはかまくものしうりくり
やうくまいらせて申して、のいへくらんとんせにと
そうそうの人々つきのぞかれていまやさけのまんそこ
つもくまいりとむさし方わられせんすれとのかうきみ
さのまゝにさまものまゝかきかかへすく酒をしまいらせ候と
そうすすめるまゝもかよ気をせよせんぶらの
れ方さまうの君をあくまもはやはからうすれなやくせういをい
れす人はの方に今一滴まゐらせくまのるやうにとらうひざし

せんいせのこゝろもちくらよべて今まん念仏文字ずくいんかど
まやをめてぎんのうら紙かくして御とつくしたる庭うめへ
らけへ上下から此てよぶん幸申てゆるく出しぬる人で也し
まるそうかうある山伏ちゝよりてまけっらとていろこぞそうせん者さ
てぬさへかくすもうそのくそうせん者てめく申しあ
けれなるよふえれで今よひのせんおうそとこみそうい世のこゝ
とつひゆく出すしまゐて見とそことられかゝひあるたん者さ
らかゝげてむらく消え跡の雪ととをまとくとこ町がと
くりたるむ抱き語しくおもしれかし魚はせんげくしもいのに
のづきてき心らしてあしぞやよふゆく出るかくてとこう此
文字を取そてかばへそんまくのつき路ふかるひのつあまる所く
せくふいさるそのくびわりゆき亭なる大そやう大十さん
らうまわふうりそうられはいりたるへぞしさひつれたりての字

井上さま小とんとおしへ入すりかえらし山乃守へ行ぞそくかしけれ剣女
これとこそ路はおそれのうまへすまえのられ於事の今
はかくみてしの路ひくおひたるつま多をおのまとあひくかる乃
ことのうし路なうし路とぎしあくせてかさのなたてのかと
おくしてらば路さんとし路を示めよ抱すよつ風をあらくつきさ
つまそりかさえくとふきこわ育てらうそれで井上一めあん
事をせて剣女と決めとめんわまぜてあうてるちうらんでお
つまえぞうまかしてやくけれはがたりうきそれはそ見きせ
ちうゆく事りわひ事をあしそじ神んまおじのへき後
らふ所へ井上とやて雅じ紙こ示きくゆるおわすそくを
やまずの山ずしのもことたいへおそれかくいぞくとやて
我身てるひとこせくざうかくとのつ派んりよまそくうり哉
ぬうしらう紙ざるかしおもたろねまでじとのくるかそ

けりとかや判官ハあまりのうれしさに行(げう)をもやうでもあかり
よろこびかぎりなく七代まできうせん弓箭冥加みやうがにかなふべしとよろこび
んくまやかなるぞあはれなりけるの日ゟかき給ひてしいがみ
ま井上つまとく鼓(つゞみ)のゑらうかうたまとぞ嗚ひとくやしきかなかなしき
給あひ来らいそうの山にてとぞ供(ぐ)してゆん生のう是ハ彼ら後
れハおとく判官よりあそれひぐれの御屋うよおなさんへ
ハの出のさうとうの蹊(こう)路の大事(だい)こしぞ我べきとハ
よ右らを給へるゆゑとそいつとしてきようらもうゆるかうハのかう
万(まん)ぐ(ぐわん)をとくべさうあまりしのつてしさにおんたちかく一にけ
てうとし云ぞれど家(いゑ)給ちらうぞう元気とやすく井上ハ
ん中(ちう)わされなさけも慈悲(じひ)ふかきしきう人やし頼(たの)もしく
そ猶(なほ)しる判官その日志の京まとさまう給ひぞうあるそ
まとしハとうぞ判官とうさ〱まうらをはつかのおかれまつらう
まとく仰(おほ)せのおいのいきとて見へておさらのもとわりどうとんとく給
かゞりの松よりつき給ぞ是六角山のぶんぶんよかしつきをとくもし
くらゑをせはぶやうまのしらき山おがりまんとくばくくをとるの十二面くわん
うんはよいつ屋まぞおくれかる白山よ条りておよきいゑうの代文を
奥(おう)こ給らひとくら月日ち給うまへにぶん〱よ参り給ひへ御流
やありて家ぞしへまんひくら参うかとくおくれかしとやむの
あまれ是つわきうかせし給らとり給て御ばの書とうしとひ〱あゑ
ちうくまりとがしの式を給〱ぞまりハ商(しやう)理の大わかりりかまならる義
らう給ハかうふるとる照(せう)覧(らん)ありえくに判官ぶと給ひける
ゝくぞ代のしるしのむかし給やまるるハ是んなさろうにやもしへ
こをつうせおのし彼と毎夜(よ)はそうしかそられやうと見へさく来のは
うろへともしるれぞ〱女人〱あつらるも尤らまてうぞれみろはかるに
まかりとて給の仙(せん)そして行へまいをれバ兵衛かうしきうん中〱

行てしたしらく山へ登りし大勢おくらる残りとゞまり大塊にま
てどひけるまゝくハおもしろきひうんなすまゝえ弁慶もかの病ゆへ
ひとらんなくぞひにゆくひ川のきくぞろくひくの行をかけよし
機をみまゝ八つ三月二日の事の者まてかゝえくまほの小舟にお
きびふくうまへ急ぎわらせ又らんらんさるをのしておみして
酒まちひきるあをありもしき流ざくいなくまの内にま
入てしぞうとひろえんのきくもとら終りてぷら終うしのそき
みんなれしらまんぎんまくと今さらりあまりむく流ゆ人のし志を
あげてしゆぎやうじやの者ひとやしらたらんまんぎんのてしとぞ
まつまその人らうちて今さらんおしよくひとやるれぞかくこ川
くこれとびとしれどいうらんのぬのそきまさそれげてしひら川へ急
ちくしおもくしらくそうりしらるうらまきんさくしきさ三こ
人生とくはらり生くまとおへと云るれども此すくいまうとそらで世流

まらさらバ流しんくく生せしくさくさんのいうすまに付らくとせ
ともなせしもしおもえらかどきうてなまえみ流さぞぞ
いりまおりておせとくく大勢ら待されどもぷしとはぞう
てさんくまてろうそれハおやのひハ志やりまへとしさされどもしょう
かへへらん人志よまゝ入ろしもとらうらおりしのらくせきこれぞ
すくさうとそ次ぱおもしも人さくまとてし山まぶ山
ぞそとわりとゆるよふうくきふうひまそ出ま本の弁慶
気とみる気れらんせうまゝ人ば関のとものとも志らうせさし、いとと
て底のくえんまその方りなるぞずしこれとかんくいつる方
山ぶしぞとに入りぬ。気ハこう大事すでんの山ぶしまくいへ
のまれる頭一人ハおもしするぞ何りの山伏おかくれとぶさ化
さ思らやかくし一今縁しはぬ。気ハ関所通まんまんのこゝろをおり
てしんれどわらくほこ国さうりおきやうまとやハぞうさん人と

へてのちは、西へ下りたまひしかバ、おのおのなげきつゝもしなし
の御所にかへりしが、つゐに下りたまひけれバ、御心ぼそくぞおはしける
うまひけることともなれども、さしもくとけれバ、へとかく給ひ、乃
上野五十ひとさ女房たちのさむらひ共ハいさめのさしまでそ
白石の国一のしも八りのかたにてかぢさまでいそぎ家のもの共ハ
女房たち下女まてのこらずうしなひて、今
おもふやうにおもひ百五十人ほどの人々をあひて今
あつまる八人の人々ハ八月廿日出たりけれバ其
時あつまりのおもひ手をさつてありけるかの世
のまつりやれうしたてといふことなりけり
まつかなる人々の人の一手ニかれて
ひとつ今のまゝに事ともいふとはかなくも
として心ひとつもいふことはしてける事と
これまでとくりかへしけれども、しかしともおけ
ぐいはまつりての日ハこれをのしまとすりてひては
これバかりが山とあえてさせこえかねにらひこれ
平家の祖神ハかみのたちなかれてのく
あつまるやうにしてかれのもとをとふひく
ぞはありしまうけにはれの物ハもとをとひく
かつさ時ふと名のれバ七郎かつた八幡の神にて南とも
六 如まこのもとの中く義経ハ弁慶うちとまつて
夜を明けるに、五ツのとの城とゆきめして渡りをせん
とするに渡志守とし平権の頭とぞいひける。彼が中
をもつて、暫くありてのちこれハ越中の守護近
所のもの一人へさしての者とかうて山伏の人々三人
に及ぶ十人ほどかかへ仔細をかくして渡したり

んへひつるぞと仰付くまでは。既に十七八人はきたりけれは
へバあやしく思ひよせけれバ。守護への様とかくはく渡し
よくせんとしけれバ。武蔵守これを聞て猶けしからぬと。
やうなりしを北陸道小羽黒の讃岐坊と見知
らぬ者やあるべきとてありけれバ中にもありける男兼
房といふ者見しりてぞ申ける。おそらく
もと上下向ひてそれは當國へくだりて後守護やとかしを
ま一八弁慶嬉しさに眼をくらしてまさしくそれとこそ申けり。権
の頭申けるはさやうの男はさやうなる者知りまゐり
さうらひし事の有ける。ひとつ渡しまゐらせたる弁慶なりし
とこそてまづ急ぐべき事ありとて乃
語へとやかくれいかのへ紀よ村千鳥の良召させ給ふ
これあやしくせひなきまゝとりしかれ弁慶あまた加賀の白山

こゝ連てゆくしは坊ならバおれは坊やへよ示されたくへとまお
やしめらるゝこそ詮なかれともいへども。然辞をせらるゝうち
引ぶさて居給ひけり。弁慶腹立そるすぐにやありて。
走りよりて。手をとらへとふまへてたゞ肱ばかりを肩よ
ひつ立て濱にくらしつゝおどり汝が人さかしくするげ
捨て腰打ち扇ねき出しいふらしてまくつてを打ふ
さんざんにふせぎけるが眼をおてられさりけり。
此の方へわまりけれ共いふさに聲をとそくを悲しびて
かに思ひたりけれたさずかへかれこゝ思ひでまでぞさぬ様をかお
ちしけり。平擒ののこ是をとんとくぞへくく羽黒山伏程らる
なさけなき者いふり名も利友かくいふ無こ給らる
まてもさそこそゆらんぞろふよかまへ程よりうらしくなさけな
く打給へるこそくやしまでと全くさることに給ふ是はそれならしかず

まてせうろ渋ゑんすらくしそはへかゝるはいさうしこさるすくもと
はそら兄まめし召へこゝく弟とさしゝ手すかりかぢ来のせはめり
てゆしそうへぞや弟ちんはしてさし越へをみて何時渋のまゝは
羽黒山郎の弟ちんなしもそぞといひされど目にかさらこ
といさきれどもと出防のむすめ小そういのはたえすまで
どく弟とまこ一さらで弁慶と和殿が原様まゝれらうに
わさうでで出羽の国へ一年二月の間まで〳〵ねすかいましは
らしまゝ酒田湊へ年八丈より人の改まゝ酒田須家の事也
さ今わらかへさんどろ者のゆしそおとしをきれ権の
こたまよもの渋へ弟ちんとして貸ゑしそ渡もそものじ当れ
どくわらこさ弁慶いかし庭らされ判いはあそれさの
ひゞの志てうすつくさうろそむかうさう給ぞれぞ
はへとそし方の着渋へあかさひろれ尋常しやうなると
ぬかせなりて渡しと守りふとてせろうぞんのかご兄とる
てゆそろへはよまりせろく忍てい丈はの渋れいこと
されど朱てせんとらく弟弟よそそなまう坊されじさし
提をとみんらくかこさとう神くとひへくとこうまし増や只われ
しまそれとを同のみさうやろうかうしてたあひしとこえ
てぶこのそやしとにしてし西の渋ひまそう武蔵志ん
しまぞれた悲くまでぞらうるまらく判官の御扶しに丸
縛らくし急とさて泣とくかしきるいつまでしまんとうじは涙
せんさく現在の生往とおそれなりそ妙現んの妙なれ
と教えそうや八幡大菩薩をゆるし渋へわさまのし二月
世尊のかとこくさしをうけさこ弁慶を伏ころひ歎にけ
まことざつひどをてこころ並居お消えく入るうに泣る
まのそり判官兄も人の為あすれのかとぞ一果報千つぞれ

はしきさく筆持よかやうな心さしふつきめんく人ゆかまし
恋まのくをいふくおもくハ涙よのこかりくそゆきて四袖
とぬらし給ふ台のくさゆしくらしはせて尚ほしたくやも
をまちゆう名残かくまて程よ日も暮れもまもしなくく
たゆうすひら屋くあうくぼの方さんばの所ぞまきる
こしてころこのをちゝさまさまそうしをしきそぬるを
のかなつくいをせ乃森よつさ給ふ在目ハみえまう給
さうわくまてくわへの屋宿くよすらしやさもかの給ひて
ろへ宇平かり瀬のとまりと越れいちふつましやうとうくの
さかんぢうみらしとふとこるとそ給うてい岩戸いれ
とつふ著よつまそおもれ苫まやよ屋くくと借りく乗うく
ゑもよれもののくらまくるうれ浦りのまえうちめとつふすの
とうれくうると給くれの方よかくそれもひつくて給へ

よきのうくるみれよるくぶうまいしもいはまそんし
めそしうさこめをぞかんくう弁あ文これとゆりていゆくくとくそ
れもひまれじかくそはくまかすうへ
うまれそらたきよるようくきこつましもいまそれ
思ひ
めてしうきめはしみかゞくていしゆの岩戸とも出給く
きうくとれ越後あ府なはえのはもるるのく観音堂とと云
そなりまきて著給ふ代乃本尊とかりハ八幡まんあれへの安倍の貞任よ
とせの給ひし時なも國乃はさ祈禱れつさわよたくとえの比良
責
しとくるふ有徳れ著のよ給付く二十のまりわるひと大給
ひくうんのりまえ給ひ源氏のし尊代のはなれれそれ
ともれ其来ハそれわそくのをうすろは祈念れもとも
[七] るぬえのばめくれむひさかされしもす
うくよあらこの出府の寺こぬくるいよりてしたの浦の

たいそうにらうどんのことにて其のゑ山みつゝき給へりすき
まそくしゆのとれどもとまりててへいはなくとらさらす
そいそうめしてあらへ人をもとさいしてつまいくさしそれ
まへぬ魚川からが二百よ人きんとんさうとしまゐらせ
ねらふしまひしもとも方々しくさうやう法まいれ
たる利友そひとり一人おりかをりきる所へとしれなくとえんのいかう
まさうこうするそのしまそれハ持参にしてまありんといふそ
く利友ところそう志給ひまゐらこのすまのくへらくるわ山
ぶしとの給ひしぶ今はらくろちそれんひさうへらく一段
のらうく給へ来りのが身と親のてそれよいせんゐつき給
ぞうはさんなそへつ禄よおそらしはしていかこれは当をまふゐる
ふろのそなくしんたり問答志給ふよじさし清きのくかそうた
ろ魚うゐくそいてさうしそうへおていねひのやにいひ

三よいのしやうらんそんとこやうより下つまくせいびやうらい
月四月のはよいはおりて入は入あわせびんぼうくせんこの入あ
ふしやうたるていまくさうゆのくちり付てこゑまんの此ざんら
けうし給ふ子給ひろべくさうすわくべりそふかく給ふまはべらん
ぶんとけうし来りてそのふなけうし給ふおりとすおねひとすく
ぐさうもんぞうりがかねほしとおもしきを進元もとにしをりたるはいを
しやうくいつくまのしやうぐらんのつとやまかうはい利友家とらいくさ
ちんしやうく陳親り給ひてしまかくれよう是よいらせかしもて
こそろをふかくいへ元かくれそしてむせうの而くはあらば
こつくまんくはなかしはらんをうるの御くはあられやうにやしは
さうくはんやをあめよ。おひ笈一ちやう給ひく凡人来てせびんせん
それじ走るはかれんのまへてせ利らくしほしは笈をとて不浄
そのまさう物く探とうさせんこの其それなくいあもまむえんわどの

なるかなくひとほどこのむすこをひるまでぼうとねかし置
らんハそのまゝ志てひよむそくしんでゆてハ小あたり姿一ちや
うでてあげて人ハなきくすぐにてて出したが剃刀れおひのくに
ぞろらかむさとうりこれとんろうあらやと思ひたるあまに京之ず
ひのくにとりて出しこれハいつとやまかれど年ふる又あさゆうらにひく
思いくかたくハ年小と人をしるかり故やうちとこのかかうにとれまた
づらぬかしいとひるれどじらんのうちとりことそひまされどかゝる
ますとたうくかへこのかがみをとし出しこれハ山すがたれいのうちをみ
おとにゆてぢ縁くしつたびひるまハげのひのくずくを拾
納じ又ハこれをわすれてそこいひまされどとりてやくかゝ
をくまとさハ天人のまをわひ天人のさかくまる井れる母がさ
ねのこぬとえ出して是れハいふちこ天ぐそくぬるをかやう
のなかく入ゆくやまもれハ母志んをゆくはけしるしが、おえふ

てゆきあらく縁山うんまんのそう代いちふくゆかうかつたえる女
いつかまくらをおひかうてとせやしゆし稲まよりの皮の下
あまは掃く下つまうらとでうせんとあすて休みとられバされ
そさしゆらんとや、さゆて今一ちやうの姿と御出し御入ん
らく座とや。何ちやうかくしあまんはまかせて御らん
せよとく又一ちやうるを出そうことう姿てそえしと見。
さ姿の中まへかふことても縁あてえを見つけさうり
とて入らうでうぐくもれにもほどくかうまでうらさへ
くしごろかくぞまとどうの年女又ハ手をあらせくだとむ八
まんとこ祈念してその女にハらんどのまくわせ縁ひ色
とそくもふおやうほして罰あかう縁くるやなれバ御志
やういはくもくて世話らくがすうとあけまでも志うへ入て
てたひのまとて見てひきあけてうらされバこて

もとよりあく道さうがくるとひてかとくたるをみれしぜんがのと
む孫う・ゆさんぎやうすてみえそらず。きゆるくゆゑやう為い
わうくなりてせ孫ひをみるとそうくだされうをおよ孫へとゆゑれば弁
為さされどへそ臣をひひつみてはいなりひとくくりさうみんなはへさ
うみくうもとよう孫ゆわみぱけむうぬらをいひられなざいさうすく
うまちさくもとかぴ○まくいろねこととうすらばいのまぴさくよめにへ
をめがおほくいらんもろぎとくいひられでしぜんのうへつらぶ冷ほよ
げるくうさいとう孫てと文でおひをとくはいぢんのうをまじがこと
とさみれはさきやうと○いとぶりまてともうて窮うハるく孫よ来
つもうくふへ○衆ことよわしてはむりひる来りんとろたうやと
おこされていせさうろうとのをも一人へくちうくおそるうに
ろうでんのたき一人ハ天でのまたりしおひとすうりぱんみよ
いいうやうのでゆをはうはうといひられでさんさんみしえせし

やうりつまやくのはうひろまへぷかさのじくしきおゝんなるれはうる
けゑいいろきのまうふくぞえし百てすらくま、白米いたゐ三汁くろ
よう○二石三斗。らく白布ふ百さんえんのぬの百さんくらしのお百志
でもこう孫又十るまやうしもそろへるむまセひきおうことも
百まいぷ○これそてさく積つみてまつうとろうさすうらかしのまつく
たりともすぐぶくくまんとでやまそうぢんのうへいづ不思
ひひゆきもぷさてあて貧ひんたるをのうくは孫ま。おちひぐさく
ゆうらしくまくいそうぞしともかぷさのぜんくやわけて孫はへと
くこめ二石志る布ぬの廿さんらしのえセしもすぞ○十両を
そろへるおぜんめ二疋これなりかくはとちようろをのもとそのへ
ろへくるくやよろく孫はへとまびられしていくさう公をん
の神ゑとたすくさかえかうせんまくめでこうくす孫あて
まゐさらんへるとしへるおひよむうひくらいきのつへさふうすと

ゆかしむかしくわんくらんそうかしくとしてさんしつくらん
こやくさんざやうにぞくそいのりきる袋をつきさくるかうく
らんくんよ無むしのやよろね。のためしきれいがかくや元をこなよ
ひはねられへはへんのえつくひおくらく海へ行てもをきぬてをとく
たびは入をとくらんのゝくがりしふぞわづきまらゞそて和しぬ
まされしかてとろたるをさんの刀なまくまれつうちくみまいらせてよ
あまやうしきりくるまみは是女ともふうとぬつしもすくなうへ
うちたましもみる殊かづるまるはひめまゐられぬくらゝかくて思こ
れどもかくあのもる生をのやすまみをとよりくのうらやと思
ひくらんをんぜうまあつく弁参はかくと云名しむげさく
らばは女まとめてのりけきるわらしまあいおさんさくみまと
まよ下つま才ちへとうぬりてとしてまでゆうそくとんのさえ
さりおろしろわらしま、ひきさくさ山とる多くかく

感心さともあて御まへ刀へ行へや風いいままいわらしがせまよらく
きらびろとてへくとせやしそやそろがわ泣しきのむをこ行
へじ志そらくをものうしとしさまてくちうちよふりまてく出くるを。
くさそうやくくらかのすしひ志て長く入そこそ風くるもと
おばゆまいくきへきとびひもちて様をぞ風ふさきて
くがふへ殺とわぎ努まるへ志かとまひてぞふさうら。
わき代つりみうちきぬ志つこぬとこ給ふるも戴身もかく
そわゝめと思ひ給ふま心かゝく志くそろかの沖よ舟ゆふひ
給ひそわどてをかすふほしくへぞく風よまろせよるもて行身
とむきよの志まへるせ行くまいろうつもかくへ舟ともせ
んぶしきれ打入すみとうしくよせゝ○くすりのそうゞう
へとせとく行されとも志ろ山のぐあるりあらしたるゝせ
えらしくてきよの志まとちるれくのこれゝ花をさくかみ

こなさんへでもまゐらうぞ。さう言ふは見もくれず。ただ〳〵
としてうつ。ひまもなし。出色いとまもつく〳〵ひのあしにしたがつて
いのちまであらばてんとまほどあるへさるつのふるくほどへ元は風
とやらうけて今一度くどふ付くとをかくをあさせ給へ
とて、役者の中ゟちらさやまさの紙を出して八丈をと王
よ来つかせほせどくがうこゝへ通り給ふ水のうへをくれるみ井の
乞食よかつらのかゝるよ君がへくく諸ままよなあとらくうらみへ
へさせ給ひそうぢされ是風はやむすほとさら給よ目をとおそ
よくされねまでじぜそのまゝ。けよをたらつまそう。つくんぞ
く御供しそうの。と此恵はそうのざけらう面風はやらく
身をひらしへでもあらうぞら。あくされ共二見風やらくうせま
このととく申すとゆく所よ来しやえんばうよ君されじ風を
忘れましたる屋そ□れじ。もうしくてくんやもらく

て風と見るよ行かゞよおかつきかつるよそこくねがふ。
法師とさしのあをてくぶふおかりてさもやまえしらくく給ば
いたゝさらふそこしひされじ君らその通りてとまつらせ給よや。
みな衆よつきゝろやとまる給こびくその秋のうらよくろこと
けつ家く出あんてあんくてまゐらふ宿とらあくれ共やひとの
大明神を拝みとまつる九十九つものち乞よかつりてかんかう
のさらぞこえくぱ八十八つものち面ましくつ所と行ゆく。おお
らうの松づらいらつしやいを通りくぜうこしつ所よひらら
やうく井刀き川かせんかかまもんしろくいて海道所へくと
通りつ給ひく御供ものせきこそうきびしくくうつ参るへきや
うしもるまされじいつぜんと給し通されじもしき給やもさらふ
ほくのさん所とのつまへ見るまくあそらしまつしどく今は何
するほへさらあづらへ志んはどんやくと判を反くて下段

山ぶしは縊(つぶ)りあし二ちやうの笈(おひ)どうぢうにてまゐらせなり。
弁慶丈の袁をもとにえよつきおもやう御(ご)しこくなくう
らく(ゆるさ)れしぜさとうたちれしとかんじく何かの流くらかなくそ
進かしまさいるみ給ふしやしきれじ弁慶さゝ人へかゝハかれハく
まのゝ山ぶしのくぐ(ゆう)仰られけれは山ぶしハ志てきうでんのこのふ
てひらぎさやつをうしすふあくはつくよけ顔(かほ)かん付らくはるひかる
ごうとおてくくまうきぞひ。これかこゝあ給ふべきらくはんく
ひとは立出てぞ召りそがせてさとうたちれしとかんくうらん
たよくこゝやしどわきてでくら御しもか給すでくらの座へ入給
ふ見(み)て御らくひとは山ぶしよつきら給ひくおかれじかさらり山
あいらい山ぶしとさとく給ひくくろのこゝろ三度のやく
たらは付給ふ給かく毎(わか)からあまうりそれじ二三日れとう
ツとうれうふたゝくのこおり流(ほう)星たゝくのきく○
ふさしゝふきみかさわうき(僧)しばらくおまさうのん給うべきやらふ
こゝみさ給ひてくすゝてはたらる一人おりてそうかぷびや鹿(ろく)にを
てまふの仏からはたらうそうぞくちかきさ所家里ハたちくべ
き山ぶしすてまうらくぷいろ〳〵まきれどもその志もしを。
けふ山ぶしとらをとすゝうしを流へとりてはうとこしたりよゐ
くぬのとくろとまくいつまでもハさとうせ給ちねりのあ
まとりもくまのくらんぞんとやハ今一日ちとうこれゆうりされ
だ。やりしやさらもさぎぞおんもとくらん。志やりしなりてをん
じや一座せさ給ひまうてかんぞやとそこやみちかさいはなれた
ろりきにいまさきれつひとなさ世給へ下らくでの○ふさぢ代官
おぶうら大内三郎とらふものでござ世の風下したうへ参ちくそ
そうしらへかくやこれハ判官信りと進らくハ志やらりかへにく
くれ候ぬらぶ志やうの弟うくハたふとゝのりてとその

しかるやうなるべきせんをあつぬとのゆへにほのくるしみをうせんとし給ふ
さればこそむかし涅槃のときは不浄よりて世尊へ三郎ハ
はやこゝをおしろうしやうらんなりといふをしらくゆへにじごくのひん
とくの祐ハ十くとも縁ぞハのりびんなハいきのおさ給ふさに
あじりおくのやうをしまつをおからがまぞるべき。さまざくの縁
開示くひよぞそけ出ぬへりしとやてゝそのくらうあひらくひ
そまくふさかれども。これハひぐえぞうちなかうの本をそのべし。
さらめくられをしたうのものふかくひえめ。たまたまうくりしかるの
ちんしてせさ祈縁へとりしをさて弁慈文をくてわたられ金き
のおやのんとをしてもさらく人の心ハしりかくししぜんおす
わうべくうをいさ給よしゆへりとぞ。しかの下界のなびてつゝ〇かき
氣くぬきのハおもじを財のきれいぬよもしを受べうくとそえり
きろ。さらくいのりてハられをとりきさへてきこしんハさうりんしもとを

しきみらくひちんぞまあまん弁慈文をまず過さゆまじしおろく出家編
ひとつのうとりにハむさし給ひけち骨々ことゝ十良ぞんのりご寅人
たがえがをとく人をとねふちぶのぬうよつ遂なしきろ。さうハなんぞん
ま入ぞりきはのでめれしまりつ宝やくせきろ祈くぶしてそ出来
つらくおぶんせやらしめそまよらりぬちしに十二三てうりの
ちうまんをとぞめされぞろ。そじぶんてしんし縁へでも弁慈文をしる
まじとなしまみやまろ。ぱけ人そいのり給きる本しさん市れおさ縁
しきたや。口をしうゆいぢくをこ河まうされども。おく悪霊と
出うもじきう。ぼぼうや人きまうる魚ハゆうをぞんしやいよく
そまつとくぞうんそのしぶ。まづ目ハうてめなりうる目にうまことうり然う
ぎやへのハ今いさり人命しいてく信じんまうろ。喜悦をの河あさめなる
ちじでりをあるるれ見らんぞんのはハ金うれねぶじも恋ひしられく
そ門もく思ひりか。はいのりあふせとるくげぞきうてうまんく給

くらまでらく参りをもそら。しやうさん百度参のまへひとくとし
のそ百志りかる字人のいとよ小袖一つきつ参せくご世
乃やらしたらへとうりまうぱはつひのくりきらそのはふを給りは（薬師堂）
ますハそのことよ山へ尾ごまをもぞうれすくひわくはへでは
給山よ志ゆうくさんうしはらんどれど下向の時給さえ
くいそる郎けいへしなく座されそう。かくてあがんとも
立給ひ人のつきの志やう太かんじをさ給世給ひどくうみぬ
山よそよくれなを給ふの毛ばさんろうれはんさじハ始めよ月
それんばさんの月とてよ此月よおつせ給ふのよろ門おそ
ましとおしく無念文ぞりはざいぶさんよ参くせらが待り人
くま八月までの身をうく人へうりくござよ河よつき給ふ無念文も
わをあま山よかるてしのらるへ参りわそその夜ハ又所の
乃ゆしあふ小一夜はつやまさげ此の河とやハぞく給さんとんれ

らしおりつき山のせんちやうより水のうしよまれたちけ
つくく夜のよハいそぎはもくろよきさよいさくふがまへさへよ
きさん所あさん見まてとりとところおんまんとかなまる（伏拝）
りのこハ志やうもぞうめ門をおうろす参へうかくハその乃
はあまくはてうらぞ参りをせくぞひくのまでてよハ給ふ
始てそのくとおそうら。くはあはまかり給ひくさこ所（明）
のせんぢうとハやさんのりことそも。はなとせよ
見あうと八夏志らみつき波さりてはそとくそう（水上）
これやさむうらうとのせうくしやうれさらし
がされて月をもれとよきかうてよハ
らうつハりことはのくやさそそともとあハ
のひまよまのそれるくうひしも今こそ思ひそ（如）
てはふみとのかとら給よぜんぢやうたちぬまろそそと

ありかのうこれとぞたかのたうしみぞとくらひ給へでたる
いまのあらてやまれいかのくわくぞ行とそあふ
もとみは世くのいるをせさあるよふうぞ芝る初か
むかしのさ紀
うらんはいきえ流るゝよ月さえくらかねとし給さ
むかしのさきしはとさかんつくろひの御神ゞとれ御神
ねこと来りせらくさやまのせとやすん木とのかどしづかゝ
おもひは年よ上の山れそ申まいらせしあそきくれんがわ
のあかへぞ行まで給ひぬる
ひきまた給ちて御まよ本る孫じしたりやてさあ
とつくんつるかつてにふせの御ながんのたつ行給
べの杖みといゝ木とかん給ひくやしきの大御神とらしおを
まりあへはれ清まれ紀てるいろんよりあんら八二十日あかい

みそくよかゝりて八三日よまそうのたいあく山ぷあめより山とうへ
くるむら氏をわるの松へ出るくへまくきいづまとらはら
んせくりし世給へへさし行と見えれぞ名所くとうき
まえ一日もちくいぶれかつめうり山とやらん太かりてこ
そゆめとくぷうめろう山へぞうり給ひぬる
凡　かつめうり山とうくはさんのるす
そのくあり山とうし給すよ水のうこは方とてうり給ゐす
まぷさんちくめえれぞかつのかさんあらしくそ思ひるかぞ山ぞ
くたりまうぶいてくらえへ給へぞ時くへうりきうり給ぶも
との里に給ふれぞ一乗の宿とあへさ来とぞ山のおうりを
みくろのかうら二町ぞうりまへくあの大木のをうへ中志
きらへよしきさ二まのをくとはさん木しをくめらく金とし来り
せろうぷなくけく行うとせあきれぞつまはしさきてやとられ

きせ給ひしがきみき出してへらくてかほをまもり玉ふ御の
けよと仰せられどもひとつもあがらでかしこへ立のさかうけ力
ちかく八十郎どんのうち利友殿なりけるぞおもひきりのうち道
こそともやをとらへきまへわたる○たせめくへちゝらをよびたを
く父与八郎ひそか利友も今へかくまで思召よりたけさ
御もとしるすひそかにかの千にはの孫くたりあずかりしまで
でききてまゐらせはるまで心ヘ八郎つれごらしにく
むすめくれんよのはじさまよされとよにてこれらぐ
ちか〳〵わかね里よは男とやはしらば○ひらりとまてへ給
ひくかてろうきさびのそゝよまうにつかまへ一と人やとかり
こと紙をせすをなをえらしすひまんの一そそ行せん今
まろれはくへかさ財もえきへしとも力ずとそくならしはふか
きくらえきてさもせきあへまとうはしまへ行へばさまうてひたを

いろさのちんかくやくはおもとせばりしそのそとかれゐりとくは
ぞゑあり〳〵まうもくまそていさふき出してみてとしゆらし
きならじむさし坊か光とおくまはりけれたる八かうくうきへ
かうしいはこへ紹○行べきとへおほしく孫たおしよまの世〳〵
おとほしてそ下つまゐりんてとそびたてく若はのおやるか
あさとのそれたさいかと久しくてんたのそらる道て若の水
はもうしもそくかるく水もおうりられじむさし坊そくかさ
くそたひろうとよみやまきら八たり今もおうしそきくおくれさすの
とをかやしにやとさこれとうにもあ○の孫かかもしさまを
てれくし若よくてう雅よ山河のおかりて高をぶ拙そくさの
こびのゝとれくら孫よの都んとをれたる山八きりふくまてに
つかきさかなことりしすひそかはとうんとあれたるふきとの
里たくうちん見ひくぞうれくふうてされとも明尓つ

てんかの[illegible]はじめと思ひしが此經を[illegible]と
合せよと弁慶[illegible]くしろく水を[illegible]まゐりて[illegible]せん
[illegible]判官[illegible]むせび[illegible]給ふ[illegible]
[illegible]ひも[illegible]やしき[illegible]經のいぬ[illegible]
て[illegible]ぞや[illegible]經への[illegible]
まくらを[illegible]て[illegible]弁慶[illegible]
[illegible]とうご[illegible]やこまで
[illegible]とやいしまへよろしくて[illegible]
今うきめとみを[illegible]こそ[illegible]
せ[illegible]これ[illegible]弁慶[illegible]
て[illegible]とうしめし[illegible]
[illegible]せ[illegible]判官の[illegible]
[illegible]判官と[illegible]

[illegible]弁慶[illegible]
[illegible]の[illegible]
む[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]判官を[illegible]
[illegible]判官[illegible]
[illegible]弁慶[illegible]
[illegible]
[illegible]
つき[illegible]
[illegible]山
かの[illegible]

つきぬれバ判官主従をはじめんざくわうにまゐのことかなかさ
まやおいはつ人々とかりあべきともみんさぞ義経がんやうかくだ
これ又ゆくゑもしれずめとのくんをもてねられよふつく
ほ山のほとりよ右すせしの給ひそうぷかのこゝやかたく今まで
清月をうやまひ[illegible]たかともお酒しめされぞうにひこくを
兼房りはゞのつみざし深くおんがへのきやうとうをもとすそのた月
日のひかりとをもみんとたしくむしぼしく存さんしてつまみや。御
ふきん[illegible]ふくハ[illegible]れんのつと[illegible]ありよぶれから弥へてきて一
よろこも[illegible]くらしぼし申すもへ甚もれ一ご經へのびきし
見たどあらく。君ん一人ハと我弟子せらく[illegible]へんと[illegible]せんのうちとて
み教こなりく人さ方をひまし[illegible]よ。げわの衆とみんあきを弟子
せん々そ教とくゑへみ経ハ清くしきわの君をいくかうしる
ひ弟子をひへきかくふ[illegible]りハ杉ら[illegible]よりやうりまず

せいぐんを下しむかひくまく[illegible]弁慶よにあへばいのち
はおのさいはいとたちの下てこれらひらびゆるべく[illegible]
よ経がひくひよぶらゆん[illegible]よゆきあつく。へんよくらう[illegible]じ
むかりて弁慶のきてずかけづよふゆまさてぞ
ひの中ゆるくへりろうまるる三日ふくてり経ひてよ。一ところ
さ経をさうてえて、さこの道ゆる日八せひのうらとの宗
かく一夜日は月てそろわくまもしてのぬ路をくのせしめ。
その日くりちて寺は弁経へれまれもちてかかけ井れ方にい
せのらにはど見つらへひむくいなくはつらへそつて[illegible]
「九」判官殿みハ弥く人は[illegible]のての
秀平とうぐえん此はつひ[illegible]ハそざこえをいめんをし[illegible]
らくぜうにうまく[illegible]下つとへ関と衣はつ道見。一宮へとう[illegible]
とおりて見かつよりくば遠とも[illegible]せてそ[illegible]中こそ

こゝろみあらめでたしの出丸との衣はぞくらき迄にぞ知らしほしいく
さらうれていきさ道よ人とあらせようらぞ嫡ぞのりこうしの
そうん所となひく判官殿の進まきれしかしきれじやと
平百八十きゆくぞ気のそうかのうる我道まへはうしとそきま
いせんかくきまきまうきのをしけしまくいら丹のこはうにお
ろしきられびく平さうなくろ数へ八入きせもとぞ月かん
愛らくは○よ人をかよくるぬ衣はとく人ならぞほくはこかん
とそろへ見よ山のの宮まえようかんひまいよんゆう身女
うたらぞ十二人その下女らしたるのはびくカきらくその人でぞ
何とも判官八ろ○をくれ会くそくきりきれバめいてる百走ろうの
八十餘そや八十二しゆき八十ちやうれ来れよハどのとれにほう
わしかの称ちごの船が渡にらうら織田部ちく出丸内ゆそしよ
さ給一ころうよハ三ゝ八百町はくまきうと又郎ぞ気うせさう

さらひたよかざされらういうしあさしるまし乃義そくこの
うちあらくよそいふんせて走らう時くいいはくへを出すくさ
見渡へとらくお○はうきころ十走つぐ川むらぞ純まいろよ迄
わさしとそそそひろうぞちよせん今ハ本あく何かる人まこそ
おりふやらまわきの世気うせよとるくいはのらんしやまか
つきてぞ世田の大名三百六十人ともく明くめ日ごろよきん
んとその人ころぞ風がらく出不はく迄まるくびく平の風しきき
らう無まわらうてぞ衣河らく地をし出不はくてて今ものぞ
波の手へとうろまぞ士人衣川ひしへ気らくひらかくちきうぞゐい
そうらくがいてやらくぞつるべき山よつきてうぞかやうしよや
うらくとうまへらく上見ぬらし心ぞくまくぞれらしなりぞき
のふまてへそら山のかぞそ安いはしる岩しこまたりてぞ思
いそまひらきらくとおたらしまろぞわくしもふ水陸乃の

ほ所へりぞめのさ乃はみつまのゐなをを給ひしをぜ乃く
や出てらへひげさまのをたりきなかうしてとしもくれ
れもぶんぢ三年にまゐりける

義經記巻第七終